

小児期腎疾患の早期発見に関する研究 — まとめ —

岡 田 敏 夫

富山医科薬科大学小児科

(序言)：昭和49年度から全国的規模で学校検尿が実施され、学童、中学生の中から種々の腎疾患が発見され、それぞれ治療、ならびに事後管理が行われている。しかし、一方これら症例中には、先天性、或いは乳幼児期発症と思われる症例も多く、3歳児検尿、さらに乳児期検尿の必要性を痛感している。

今回、各地区における3歳児検尿の実態ならびにその成績などにつき調査した。

(成績)：学校検尿、3歳児検尿の方法、成績について、それぞれの地区より報告された。殆んどの地区で、第1次、第2次検尿は保健所の検診の折に、さらに第3次検尿は、専門医療機関で実施された。また検尿項目は、蛋白、赤血球、糖などが主に、一部白血球、亜硝酸塩などの検査項目が取り入れられている。各項目別の陽性率も若干の差が認められるが、一般に、蛋白尿の頻度は、男・女ほぼ同率であるが年長になるにつれて増加する傾向が認められた。しかし、3歳児の3次検尿では、蛋白尿のみ陽性者はきわめて少なく、これらの事実は、所謂体位性蛋白尿の出現時期についての示唆を与える点と考えられ、検討を要する成績であった。また、赤血球、白血球の頻度は、男児より女児に、かつ年少児より年長児に若干増加する傾向が認められた。これらも、微少血尿例の発見時期、経過を推移する上で、重要な所見と思われた。また、無症候性細菌尿の問題も含めて今後検討を要する成績であった。

つぎに、3歳児検尿にて発見された疾患別頻度が報告された。各地区とも、尿路感染症ならびに腎奇形などが多くみられた。そこで、乳幼児期腎疾患の頻度をみるため、入院を要した6歳未満児の腎疾患頻度、ならびに入院時の主訴などにつき検討した。

3歳未満では、先天性腎奇形や、尿路感染症、さらにネフローゼ症候群が多く、6歳未満児では、腎実質性疾患が増加する傾向がみ

られた。また発見動機として、3歳未満児では、必ずしも蛋白尿、血尿、乏尿、浮腫などの腎症状ではなく、下痢、嘔吐、体重増加不良などの消化器症状やその他の非特異的症状で発見されている。

このように3歳児検尿にて種々の腎疾患が発見されているが、しかし、これら腎疾患早期発見の検査方法については、いまだ確立された方法はない。

学童期、幼児期においては、現在、また今後学校検尿、3歳児検尿の全国的規模の実施さらに継続により早期発見が期待される。しかし、問題は乳児期であり、乳児検診の折に出来る限り検尿を行ない、疑わしい場合は再検し、またあわせて家族歴の詳細な聴取や、臨床症状の観察が、腎疾患の早期発見に最も重要であると考えられる。

今回、超音波を用いた胎児期腎尿路疾患の診断法についての報告も行われ、妊娠38週に実施した超音波法にて左水腎症が発見されたほか、右腎形成不全の2例も同様に診断された。このように、超音波検査法も、腎尿路奇形の出生前診断に有用であり、今後試みられるべき検査法と思われる。

また、3歳児検尿にてかなりの頻度で良性血尿症が発見されるが、良性血尿症の中に、高Ca尿症が含まれており、その診断法の1つとしてUca/cr比が有用視されており、これらの検査法も、今後、血尿症の病態解明に必要な検査法と思われる。

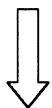
さらに、尿蛋白の質的分析法の導入、 β_2 -ミクログロブリン値の測定、などの項目も考慮すべきであり、これら検査法の導入により、早期診断がより確実になることが期待される。(まとめ)：60年度班会議を通して報告された成績についてその要点を報告した。

今後、乳幼児期腎疾患の早期発見、さらに早期治療を行うため、さらに診断面より検討を加えたいと考えている。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



(まとめ):60 年度班会議を通して報告された成績についてその要点を報告した。

今後,乳幼児期腎疾患の早期発見,さらに早期治療を行うため,さらに診断面より検討を加えたいと考えている。